



事故が変えた私の人生観



渡邊 喜雄

カインドウェア・ホールディングス
代表取締役

私は、もともと体を動かすことが好きだった。しかし、会社に入社してからは、体を動かす機会が少なくなっていた。最初はゴルフで十分だと思っていたが、学生時代からの運動量と比較すると満足できず、自宅近くに東京乗馬倶楽部もあったことから入会し、馬術を始めた。そして今も続けている。

新馬の養成をしている友人から良い馬があるので乗ってみてはどうかと誘われ、ロンドン郊外で試乗した。それは、27歳の時だった。しばらく乗って一息ついたところ、馬が運動不足だったせいか、さらに柵を跳び越えようとした。最初はうまく抑えたつもりが暴走し、柵を跳び越え3m以上の高さから道路にたたきつけられた。そばにいた人は、即死したと思ったほどの事故だったらしい。落ちた時、道路に頭からたたきつけられたが、無意識に両腕を伸ばしていた。二カ所ずつ両腕は骨折したが、それがクッションとなり頭蓋骨が砕けずに済んだ。現在も頭蓋骨はゆがんだままである。救急車で病院に運ばれ数日間過ごした。唯一、若い看護師の献身的な看護に救われた思いだった。

それから10年経ったところに、だんだんと目が見えなくなり、耳鳴りがひどくなり、口の感覚が失われていった。ささいな音にも敏感に反応するようになり、イライラすることも多くなった。医者通いを何年も経験したが、西洋医学では治療の限界であると宣告された。事故の時の後遺症で頸椎をはじめ、骨格はバラバラになり、薬害も含めて内臓もボロボロとなっていた。ここで人生が終わってしまうのか？ ギリギリのところまで追い込まれ、自殺も考えた。しかし東洋医学の存在を知り、医師を何人も訪ね歩いた。そこから回復が始まった。普通の人間の生活に戻れる希望が持てた。

二度と後遺症で苦しまないためにも、学生時代以上に体と精神を鍛えることを始めた。まずは中断していた馬



上：乗馬クラブにて
左下：古武道の稽古
右下：国立劇場での演奏



術を恐る恐る再開した。馬も購入し、本格的に取り組み始めた。それから、兄のように慕っている古武道の宗家の方から、以前から誘われていた古武道を縁だと思い、渋々始めた。結果、のめり込んでいった。今では、道場で指導員をさせてもらっている。真剣を使うので危険極まりないが、まさに真剣勝負である。自然と精神と肉体の統一が図られていった。以来、ゴルフのパッティングで周りの雑音が気に障らなくなった。人間の体は不思議なものである。

また、日本フォーマル協会理事長に就任し、普及のためのダンスパーティを開催した。そのため、ダンスも始めることとした。自分は、エレガントなワルツが向いていると思っていたが、先生から「あなたはラテン向きです」とはっきり言われた。映画の「Shall we ダンス？」の竹中直人の顔が一瞬目に浮かんだ。しかしこれも縁だと思い、15年以上も続けている。家内も私に内緒でダンスを始め、今ではかなりの踊り手となっている。また、四国を訪れた折に、芸者さんが経営しているクラブに連れて行かれた。その芸者さんは、四国一の笛吹き名人とのことで、一曲聞かせてくれた。あなたも吹いてみたらと言われ、勝手に音を探して、曲らしく適当にあしらって吹いてみた。学生時代にフルートに熱中していたたまものだと思う。吹き終わると芸者さんが「あなたもやるべきです」と言って、私に篠笛と教則本をくれた。謡口にべっとりと口紅の跡が付いていた。長年愛用した笛のようである。これも縁と思い、早速家に帰って練習をし、家の者から騒音問題として取り上げられるほど、毎日練習した。以来、笛ともお付き合いをしており、数年前に名取となり、福原門下の中で選ばれ、二回ほど国立劇場での機会をもらった。まだ趣味は他にもあるが、誌面も尽きるのでこれまでとする。人生とは、仕事と趣味のつづれ織りのように思う。そして毎日を楽しんでいる。